

邸地に居住せしかど、明治廢藩の際家屋を賣却して退去せり。

○岩田内藏助居邸傳話

混見摘寫に云ふ。岩田内藏助居屋鋪敷之内に化物居て、戌の刻には定めて出るとなり。内藏助兩三度も切突きけれども、或は中にて取り、長刀にて乗せれば飛上り、兎角飛鳥のごとし。其の化物一丈餘りなる大入道なり。惣躰黒くして、眼日月の如く金石よりも堅き躰なり。利常卿聞召され、山田半右衛門に仰付られ、一矢可仕とて、能き根を持って内藏助が宅へゆき、兩人相待けるに、案の如く戌刻出たり。半右衛門矢取て打つがへ、しばし堅めてひやうと射る。たゞ中を射通すと覺えしが、中にて取りにけり。二矢も中にて取りにけり。半右衛門無念がり、其後は矢も射すと也。其の段委細申上げるに、不思議なる物と御意にて、其通りに成居たり。然るに其後内藏助屋鋪御用地に候條可指上旨、替地は何方にても勝手次第望可申旨被仰渡。内藏助奉畏候とて家財残らず取仕抹致し、駄荷に作り上方のかたへ指登せ、其の身頭へ罷越、私儀居屋鋪に化物住み候に付、

恐れて已後まで居申間敷者と被思召、御用屋敷と被仰出。事、一圓難有とは不奉存、此上は御國に罷有候も無益に御座候。御暇申上候と云捨て上口へ立退きたり。小松邊にて本多安房守鷹野に出たりとて内藏助を見とめ、如何の子細と尋られたり。内藏助かやうくの次第にて御家を立退くよし、物語りしけるに、安房守聞て、追手がかゝらう程に、隨分情を出しおゆきやれと申さると也。扱内藏助事、利常卿の御聽に達しける處、他國へ遣し何廉世上の批判に成るも如何なり、指留候へと、名は不知人持の者兩人、足輕三拾人指添られて追懸たり。内藏助海津に有之由沙汰あるゆえ、宿の板敷下までさがせども見えず。直に叡山へ登りたりと。後には越後に居たりとぞ。紀州公より三千石に召抱えらるべきとの事なりしかど、日本中残らず御構被成に付、ゆくこと成らず。遂に再び立歸り、子共等を召出さるゝなりと。今按するに、元祖内藏助は、慶長十二年に利長卿被召抱、其長男二代内藏助同十九年に利常卿被召出、父子奉仕の處、元和三年父子共祿を辭し退去し、正保二年父子共歸參、家祿元の如く賜はりたり。されば右居屋鋪の事

に付き退去せしは、元和三年の事にて、歸參の上再びもとの居邸を賜はり居住せしと聞ゆ。

○岩田内藏助傳

其の元祖は岩田左馬助と稱し、瀧川伊豫守に仕へ、天正十八年小田原北條征伐の時戰死す。其の子傳左衛門始め太田但馬守の家人と成り、慶長五年利長卿小松・大聖寺征討の時、但馬守に隨從し出軍、淺井繩手にて同僚井上勘左衛門・大野甚之丞と共に殊功を顯しけるに依つて、慶長十二年井上・大野と共に藩士に被召抱、千石を賜ふ。大阪城責に又戦功を顯し、五百石加恩ありて、家祿千五百石を賜ふ。然るに元和三年故ありて祿を辭し、浪士と成り、松平下總守に仕へ、又堀丹後守へ寄食す。丹後守卒後、正保二年少將光高君に復仕し、元家祿の如く千五百石を賜はり、馬廻組頭旗奉行を命ぜられ、岩田内藏助と稱す。後致仕して老名休徳と稱す。其の長男内藏助と云ひ、慶長十九年利常卿被召出、新知を賜はるといへども、元和三年父と共に退去す。正保二年に光高君に復仕して千三百石を賜はり、使番を命ぜられ、後馬廻組頭に進昇し、致仕して剃髮し、内藏坊と稱す。

次男四郎兵衛新知五百石賜はり、使番を命ぜられ、後先手足輕頭を勤めたり。三男は彌五左衛門と云ひ、實は長谷川大學の子なり。外祖の氏を襲ぎ、岩田彌五左衛門と名乗り、百五十石賜はり、與力の士たり。又元祖内藏助が弟岩田三左衛門は、九里甚右衛門の女を娶り、舅甚右衛門が家に居たり。後山崎閑齋方にて浪人分に二百石扶助せられ、大阪城責の時出軍、閑齋の備に罷在り、元和元年夏陣の時大阪にて病死すといへり。按するに、元祖岩田傳左衛門、淺井繩手にての戦功は世に知る處にして、成田半右衛門手書にも、此の時小松方は拜郷治太夫・宮田小兵衛・不破奎兵衛・安彦左馬助、我等以上五人、金澤方は太田但馬内井上勘左衛門・岩田傳左衛門・大野甚丞・水越縫殿・松平久兵衛以上五人也とあり。此の時利長卿より賜はる感狀左の如し。

今度於小松表淺井之在所合鍵、其働無比類之條、爲養美尉斗付之脇指並黃金三枚遺之訖、彌可勵忠節之事、尤可爲肝要者也。

八月十二日

利長判

岩田傳左衛門殿